



# 地から湧いた幸福 (一)

金子彦二郎

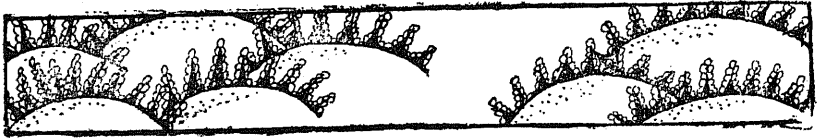
一 「佐渡へ佐渡へと草木もなびく

佐渡は居よいか住みよいか。」

とうたはれてゐる緑の佐渡が島に一番近いのは、越後の國の間瀬といふ漁村であります。この間瀬村に、今でも「間瀬の孫九郎、てんでの稼ぎ」といふ諺めたいものによつて其の名を傳へられてゐる孫九郎といふた漁師が、ずつと以前に住んでゐました。孫九郎は若い時から至極人の好い、さうして鯛釣にかけては村一番といふ腕利きでしたので、村人から恵比須の孫九郎くと、綽名されて敬愛されてゐました。

二

孫九郎は今年六十歳になりました。しかしまだく元氣なもので、釣竿を持つては誰にも引けは取らないので、一人息子の孫一と共に家業にいそしんでゐました。



所が或日のこと、ふとした用事で寺のお坊さんを尋ねて行きました。要談が済んでからお茶をいたゞいて四方山の話などしてゐるうちに、彼の目は坊さんの机の上に廣げてある面白さうな繪本の上に移りました。

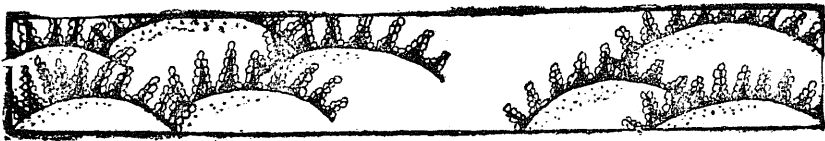
「それは何でございます。面白さうな繪が書いてあるではございませんか。」と尋ねると、お坊さんはいく／＼しながら、

「はあ、これは往生要集といつてね、此の世で作つた善業・悪業がそれぞれ來世で報いられるものだから、せい／＼此の世にゐるうちに善い行をしたり、佛信心をしたりして、立派な極樂往生の遂げられるやうに心掛けるがい／＼といふことを教へ諭したものだ。」

と言ひました。

「どれ、私にも見せて下さい。」

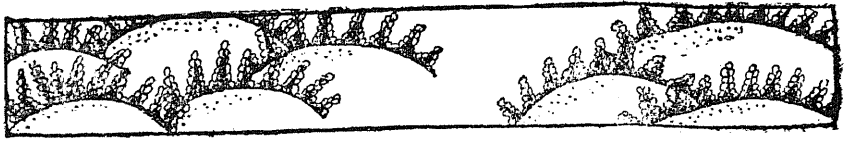
と言つて受取つて膝の上に廣げて見て行くと、そこにはさまざまに珍しい地獄極樂の體相が寫してありました。血の池地獄であぶ／＼藻掻いてゐる囚者もあれば、劔の山に追ひあげられて泣き喚いてゐる者もありました。どの一枚一枚にも新奇と驚異との腫をかゞやかして眺め耽つてゐた孫九郎は、併し、商賣柄として、瘠せ衰へた一人の亡者が、



鋼鐵製かとも思はれるやうな眞黒な鋭い嘴を持つた魚族どもの爲に、胸や肩先や二の胸などの肉しむらを啄み取られて苦しみ悶へてゐるむごたらしい圖に最も深い印象を焼きつけられました。而もそれが娑婆で慰み半分に魚族を殺生した者達が、一寸だめし五分だめしの苛責を受けてゐるのだと聞かされた時には、「いや、自分の殺生は身すぎの爲で、慰み半分でする殺生ぢやないから罰も咎もない筈だ。」と強く打消しては見たものゝ、心の奥にこびりついてしまつた罪深さの烙印だけはどうしても拭ひ去ることが出来なかつた。

## 三

善人の孫九郎は其の日以來、身すぎの爲の生業とは言ひながら、つくづく我が身の携つてゐる殺生を事とする漁師といふ職業がむごたらしい仕事であることに氣がついたらすつかり厭になつてしまひました。それでその日からといふものは、沖に出るすなどりの事は一切息子の孫一に任せつきりにして、自分はひたすらこれまでの罪滅しの爲と、亡き妻の冥福を祈ることに餘念もありませんでした。何仕事に携つてゐる時でも、孫九郎の口から「南無阿彌陀佛々々々々々」といふ信心深い念佛の聲の絶える時がありませんでした。お寺の坊さんの法話も洩らさずに聞きにまゐりました。その法話の中でも、



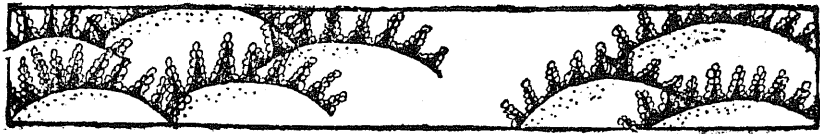
上方にある本山の構への壯麗宏大なこと、生佛と稱せられてゐる御門跡様の法話に隨喜する時には、どんな極重悪人でも、忽ちに攝取不捨の大悲の御手に縋らせて貰へるといふことなどが、殊更に孫九郎の心魂に深く喰ひ入つたのであります。

それで孫九郎はたうとう、生きた一生には、是非とも一度は其の御本山に詣つて生佛様を拜まなければならぬ。幸ひ自分はもう隱居で、別段忙しいからだでもないから。」といふ殊勝な大願を起しました。而も其の雜用や御養錢などには、一切魚族を殺生することによつて得たお金を使ふことはしまい。勿論現に漁師をさせておく忤の孫一からなんぞ鏝一文も合力は願ふまい。細いながらもどこまでも自分相應な努力の汗と膏から稼ぎためた清淨なお錢で用を辨することにしようと思ひました。

さう決心がついからの孫九郎の精進生活は、草鞋を作ることとなつて表はれました。大きな貯金函を拵へておいて、朝も晝も晩もひたすら念佛を唱へながら作つた草鞋の賣代を投げ込むことにしました。

#### 四

信仰心に燃える人の精進ほど熱烈なものはありません。孫九郎の精進ぶりは、時々父の健康をいたはる息子から「お父さんのやうに根をつめては身體がたまりませぬ。上



方參りの雑用ぐらゐる私が才覺してあげますから、もつと氣樂に仕事をしてゐて下さい。」と涙ながらに諫めてくれるほど眞剣なものでありました。

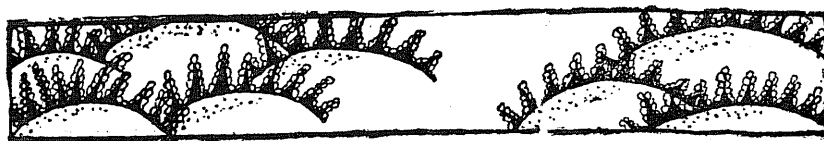
「なに、大丈夫だよ。佛様と二人がゝりて仕事してゐるのだから、疲れるの、弱るといふことはありはしないよ。私にはこれが樂しみでたまらないのだから。」

これが何時も孫一に答へられる言葉でありました。にこ／＼顔の孫九郎は、自分の健康を氣遣つてくれる我が子の顔をばいといほしむやうな慈悲の眼ざしで打見やりながら、右のやうに答へては、草鞋作る手を動かすのでありました。

## 五

都からは霞をへだてた遠い鄙路にも櫻の花が咲きます。紅い椿も綻びます。其の櫻が咲いては散り、紅い椿が散つては綻びる春が、いつの間にか三度まで繰返されてゐました。貯金函はもう持ち上げられぬ程に重さを孕みました。

ある日孫九郎はお佛壇にお燈明をあげて、恭しく禮拜した後で、其の貯金函を開いて見ました。底のない柄杓でも、千遍萬遍水を汲みとる時には、笹の露ほどもない其の一しづくづゝが積り積つて大きな桶さへ満たすとやら。況してこれは一念發起した孫九郎の精進恪勤、どうして美果が報いられずにあられようか。ざら／＼と鳴つて溢れ出



た夥しいお鳥目は、もとより豫期してゐた孫九郎自身さへびつくりするほどでありました。それをお金に換へたら十何兩といふ大判小判になりました。孫九郎は恭しく押戴いて、本山參詣の素懷を遂げ得る吉日がいよく、到來したことを感謝せずにはゐられませんでした。

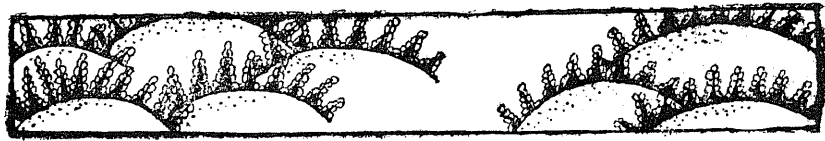
## 六

「六十三の老人を、海山何百里隔てた上方まで一人旅させるのが如何にも心もとないから。」と例の孝心深い孫一が何とかして思ひ止まらせようとすると、「いやどうかこればかりは止め立てしてくれるな。佛様のお爲なら、御本山參詣の爲になら、たとへ此の身は途中で虎狼の餌食にならうとも後悔はしないのだから。」といふ父の熱心さに、たうとう根負けして、孫一も今度は積極的に支度萬端手ぬかりのないやうに心を配り、いよく鹿島立の朝には親一人、子一人の悲しさ、水盃をして村端れまで見送つたのであります。

境川にかゝつた土橋の上で、假初とは思へど親子が恩愛の袂を別つとき、

「では父上、道中御無事で御念願を果され、一日もお早くお歸り下さい……」  
といふ孫一の腫が曇れば、

「あゝ、どうぞお前も身體を大切にしてくよく留守居をしてゐておくれ。よいお土産を



「たんと買つて来てやるから。」  
と幼い子供でもあやすやうに言つた父の睫にも、小さなしづくが眞珠のやうに光つてゐました。

## 七

こゝは名にし負ふ花の都、眞宗の大本山の御寶前であります。天空に聳える大伽藍の蔓、堂内に眩いばかりの御内陣の金色燦爛が照り輝き、黄金や七寶を鏤めた金具に映える御燈明の光、空中に飛ぶ城さへも香に咽せるだらうと思はれる焚香の煙、全くそれらは紫の靄のたなびく四方十萬億土の極樂淨土の光明世界をそのまゝ摸し出したものとか思はれません。掌を合せて稽首參拜祈念する人、をろがみ終へて伽藍の輪奐に懨懨の吐息を投げかけてゐるもの、下向の道すがら負うた兒を喜ばすべく、足下に集ふ人馴れつこい鳩の群に豆を施してゐるもの、さしにも廣い境内も肩擦るばかりの雜沓です。

本堂正面の階段のもとに、この偉大さ、莊嚴さ、華麗さ、參詣人の夥しさに酔うたやうに立ちすくんでゐる一人の田舎親爺の姿が見出されます。それはとりも直さず遙々と越後路から上つて來た孫九郎であります。孫九郎は人波にもまれておどくしながらやつとの事で正面階段のもとのお賽錢函の前に身を容れる餘地を見出したのです。入れ代



り立ち代る人々に揉まれながら、彼は年來の希望の叶つた嬉しさに、殆ど我を忘れて信念深く掌を合せて祈念をこめました。彼はもう此のまゝ極樂淨土へ召されてもよいと思ふ程の法悦にひたつてゐました。

しばらくしてやつと目を開き、垂れた頭を擡げた孫九郎は、懐の皮財布を取出してお賽銭の喜捨に取りかかりました。ガラ／＼と財布のお錢を掌のひらに移して、どれだけ上げたものかと思案してゐる時、後の方から詰めかけた參詣人からどんと小突かれた拍子に孫九郎の掌からは二三枚の小判がキラリと輝いて賽銭函の格子の間へ迂り落ちました。孫九郎は

「あつ！」

と思はず呻き聲を立てました。が、もうそれは後の祭でどうして見ようもありませんでした。手を入れて取出すことはもとより、寺の世話方に頼んで取出して貰ふことも出来るものでもありません。孫九郎の顔には「この大切な三兩といふ大金を落してしまつては、もう歸國の旅費がない。」といふ前途の不安から、さつと當惑の色が閃きました。が、併しもう一生の思を果してこのまゝ極樂淨土に召されてもとさへ歡喜してゐた孫九郎のことですから、すぐさま氣を取り直して、





「なに、これも救世の教主へのお初穂だ。我ながら思はずもよいことをしたものだ。」  
と思ひあきらめて、財布を懐に仕舞ひ込むと、再び瞑目合掌して感恩報謝の爲に阿彌陀  
如來の御名を唱へるのであります。

## 八

み佛以外に誰知るものもあるまいと思はれる此の孫九郎の仕草をば、目も放さずに見  
守つて、ほつと溜息を洩して感歎し、さて満面の相好をとろかして會心の笑を湛へてゐ  
る氣品の高い婦人がありました。

この婦人はよほど大家の奥方と見えて二人の腰元を従へて、今しも内陣での參詣をす  
まして正面の階段を下りかけてゐたのであります。丁度其の時眼前に孫九郎の過失に  
原因した大枚三兩の喜捨を目撃して驚歎の眼を瞪ると共に、「見なりこそ田舎じみて居て  
はゐるが、三兩のお養錢を喜捨してニコ／＼してゐる所を見ると、あの御老人はきつとど  
こかの千萬長者に違ひない。この日本一のお金持と言はれる私でさへ一兩の寄進を素晴  
しいものと思つてゐるのに、何といふ思ひきつた御寄進振りだらう。これも佛様のお引合  
せといふもの、娘をかたづけけるなら、あゝいふ千萬長者でなくてはならぬ。さうだ早速話  
しかけて見よう。」とかう思つた時に、包みきれぬ會心の微笑が頬に崩れたのであります。